

ニーチェにおける「生理学」——彼の文化的「戦略」として——

前川 一貴

本稿では、ニーチェが、19世紀の生物学の成果を踏まえて、身体内部のメカニズムに注目しながら、どのような道德批判を展開していたのか、について分析した。むろん、このような「生理学」的な解釈は、ニーチェの道德批判には、弱肉強食の世界を正当化しているようにも読める箇所があるだけに、人間の優劣を生物学的に正当化する優性思想へと曲解される危険性があることは承知している。しかし、筆者の分析によれば、ニーチェが、19世紀の生物学の知見を応用したのは、自然科学の成果によって、自身の道德批判を根拠付けるためではなく、身体の物理的メカニズムとのアナロジーによって、「衝動」の機能構造について説明するためであった。つまり、ニーチェにとって、生物学の知識は、証明済みのものである必要は決してなく、彼のなかで、その科学分野の概念図式は、前反省的な「衝動」の生成過程を形象化するために、本体的比喩（未知の事柄を言い合わせるためのメタファー）として転用されたものだったのである。このような、ニーチェの「仮自然主義」の目的は、文化的な「価値」創造の源泉として、「残虐性」を措定するべく、その「快樂」の由来を、細胞の「力への意志」にまで遡って説明して、この創造的なパトスを読み手に感得させることであった。すなわち、ニーチェの道德批判とは、このような彼の「戦略」のなかに組み込まれたものであり、彼は、19世紀の歴史主義的な文化を克服して、同時代に固有の、持続的な芸術様式を創造するために、「自己」の「価値」を肯定する「利己主義」の貫徹を試みたのである。

実際に、ニーチェは、1880年代以降、「生理学」という用語を、きわめて頻繁に使用して、19世紀の生物学書もまた渉猟しているのだが、その影響関係について、実証主義的な手法でもって、本格的な研究が進められてきたとは言いがたかった。その背景には、やはり、ニーチェの思索が、ナチズムの優生思想と混同されてしまうのを避けたい底意があったことは否定できまい。20世紀半ばに、ハイデガーとヤスパーズが、「力への意志」と「永遠回帰」を、形而上学という文脈に置き直して、主体による客体の支配を問題視することで、主客の二項対立を克服しようとしたのもまた、そのような安易なニーチェ解釈を斥ける狙いがあったのではないだろうか。たしかに、ハイデガーとヤスパーズは、エリーザベトが恣意的に編纂した版を使用するしかなかった事情も、汲まねばならないだろうが、それ以上に、ナチズムが台頭した社会状況にあって、ヨーロッパ全体の思想的問題を、ニーチェに背負わそうとした側面が大きいように思われる。

ハイデガーにおいては、ニーチェの思索が、「西洋形而上学の完成」として批判されるとき、「力への意志」は、経験界を生み出す根源的実体として措定されていて、その根本的性格は、人間や世界の根本原理として、際限のない支配欲だったと解釈されている。そして、このような「力への意志」は、何が、形而上学的実体であるのか、という「体制 (Verfassung)」を整える一方、「永遠回帰」は、その実体が、どのように作用して、存在者を在らしめているのか、という「存在様相 (Weise zu sein)」を照らすものだったという。つまり、ハイデガーによれば、ニーチェの「永遠回帰」とは、経験界において、まったく同一の出来事が、終わりなく繰り返されることではなく、経験界そのものが、形而上学的実体の反復作用によっ

て、永続的に成立し得ることに解されるのである。このように、ハイデガーは、ニーチェを、内在的な形而上学者として見立てたうえで、もし存在というのが、経験界の底に措定される実体であるならば、それは、ある抽象概念を事物化したものにほかならず、数ある存在者の一つでしかなくなるとされる。つまり、ハイデガーの見解では、存在というのは、認識主体には決して捉えられないが、経験界において、「隠れ (verbergen)」ながら「露わになり (entbergen)」、「露わになり」ながら「隠れる」仕方で生成しつつ、あらゆる存在者を在らしめている運動態にほかならないというのである。また、ヤスパースにおいても、「力への意志」は、形而上学的根源として捉えられていて、ニーチェは、「神の死」を唱えたため、経験界のなかで、有限な「力」の「永遠回帰」に陥らざるを得なくなったと考察されている。それに対して、ヤスパースは、「限界状況 (Grenzsituation)」という概念を打ち出していて、「死 (Tod)」、「苦悩 (Leiden)」、「争い (Kampf)」、「罪責 (Schuld)」という、人間には如何ともし難い状況に直面したときに、初めて「超越者」が感じ取られる、と主張するのである。

このように、ハイデガーとヤスパースのニーチェ解釈というのは、西洋形而上学の主体的支配性という彼ら自身の問題を、「力への意志」と「永遠回帰」に投影している印象が強く、これらの重要概念について議論されるとき、思想史的な見方は斥けられている。当然ながら、ニーチェの場合、『悲劇の誕生』と『反時代的考察』は、ある程度、体系的に叙述されているものの、『人間的』以降は、主に、断章形式が取られているため、歴史実証主義的アプローチを取ったところで、彼のなかに、一貫したテーマは見出せないという意見が大半を占めよう。そうであるならば、そもそも、ニーチェの非体系的なテキストは、主観的な読み方しかできないというのが、正当な立場であり、彼の主張を、客観的に証明し得ると思いなすことこそが、彼の文体的特性を度外視したものと、強い非難を受けるかもしれない。

しかしながら、ニーチェの断章形式は、多岐に渡る事柄が取り扱われているにしても、それぞれの主題について、何度も繰り返し述べながら、次第に議論を深めていく傾向があり、包括的なテキスト分析を行えば、彼の思索の軌跡を辿るのは、決して不可能ではない。また、ニーチェの曖昧な比喩表現もまた、19世紀の時代背景や、彼の読んだ書物の内容を押さえて、彼によって省かれた情報を補っていけば、その意味内容もまた、徐々に浮かび上がってくる。このようにして、ニーチェの外堀を埋めていくような、地道な作業を続けていけば、たとえ明示はされていなくても、ニーチェの断片的な議論の底流では、首尾一貫して、ひとつの中心的テーマが、問われ続けていたことが、明るみに出されるのである。それにあたり、何よりも掘り起こさなければならなかったのは、ニーチェが、1880年代に入って、「生理学」という用語を、再三再四、使用していた背景には、一体、どのような真意が込められていたのか、ということだったのである。

『悲劇』と『反時代』が執筆された1870年代前半においては、ニーチェの中心的なテーマは、19世紀の歴史主義的な文化の克服にあり、ドイツに固有の、持続的な芸術様式の創造にあったのは、(思想史的な視点に立てば、)もはや異論の余地はないだろう。ニーチェが、ショーペンハウアーの「意志」形而上学を応用して、「根源一者」に「ディオニュソス的なもの」を見出したのもまた、文化的な「価値」創造の源泉を、「物自体」に措定することで、ほかの時代の芸術様式の模倣で満足する状況を打破しようとする狙いがあった。ただし、その後、ニーチェは、ショーペンハウアーの「物自体」は、「共苦」の究極的根拠になり得ることを懸念して、ドイツ文化からヨーロッパ文化の再生へと射程を広げながら、キリスト教

道徳への批判を強めていた。このとき、ニーチェは、「真の文化」の再生というテーマは保持しつつも、その実現には、「自己」の「価値」を肯定する「利己主義」が欠かせないと考察して、彼の文化的「戦略」を、「意志」形而上学から「自然学」へと転換していたのである。

とりわけ、1880年代においては、ニーチェは、ルーの『諸部分の闘争』を参照しつつ、ネオ・ラマルキズムの立場から、環境に適応する仕方では生じる変異メカニズムに注目していた。ニーチェにおいては、この個体の適応変異のプロセスが、概念的比喩として、前反省的な「衝動」の生成過程に転用されていて、この原初的な生命力が、「ディオニュソス的なもの」として捉え直されていたのである。そして、人間の場合、その過剰な適応性が、「記憶」によって能動的に抑止されたときに、「残虐性」の「快樂」が湧出するとして、そのパトスを、文化的な「価値」創造へと昇華することが求められていた。本稿では、このように、ニーチェの「生理学」という概念装置は、彼の晩年において、「残虐性」の「快樂」を感得させる役割を担っていて、その隠された基盤が、「根源一者」に取って代わる、文化的な「価値」創造の源泉となっていたことを明らかにしたのである。

以下では、このような本稿の議論を、部・章毎に要約したい。第1部では、ニーチェの道徳批判においては、キリスト教の「神」、カントの「物自体」、ショーペンハウアーの「意志」が、「善悪」の究極的根拠として措定されていることに対して、どのような論駁が加えられているのか、について分析した。ニーチェは、キリスト教道徳の延長で、カントやショーペンハウアーの「利他主義」を誹議していたが、その企図は、19世紀の歴史主義的な文化を克服するべく、「自己」の「価値」を肯定する「利己主義」を徹底化することにあつた。それにあたって、ニーチェが、当時の生物学の知見を利用しようとする際には、このような文化的「戦略」に資するように、恣意的な応用が試みられていることが明らかになった。

まず、第1章では、ニーチェにおいて、「善悪」という価値基準は、少数の支配者による、横暴な振る舞いを抑止するための策略に過ぎず、「神」は、その究極的根拠として捏造されたものでしかなかったことを確かめた。このようにして、ニーチェが、あえて「優劣」という価値基準に倣い、「残虐性」を是認したのは、19世紀の歴史主義的な文化を克服するためであり、「自己」の「価値」を肯定する「利己主義」を推進する目的のもと、当時の生物学の知見が、恣意的に利用されようとしていたのだった。

次に、第2章では、ニーチェは、カントにおいて、認識論と道徳論が別分野として切り離されている構成に、人間の「行為」が、生物学的に説明されないようにする底意を看取していたことを詳らかにした。ニーチェによれば、カントは、認識論のなかで、「物自体」を、不可知の超越的実体と捉えることで、道徳論において、そのような超越者が、完全に立証はできないものの、「神」の代替物として機能する可能性を残したというのだった。ニーチェは、このようなカントのキリスト教的な傾向を、文化的な「価値」創造という観点から嘲弄していて、「残虐性」が「衝動」から生じるプロセスを説明すべく、人間の「行為」の導出過程を、身体の物理的メカニズムと、積極的に関連付けようとしていたのであつた。

そして、第3章では、ニーチェが、『悲劇』においては、ショーペンハウアーの形而上学的な「意志」を自己流に解釈して、文化的な「価値」創造の源泉を、「根源一者」に措定していたものの、『人間的』以降は、そのような内在的な立場から離反していたことを裏付けた。ニーチェは、歴史主義的な文化を克服すべく、「ディオニュソス的なもの」を、形而上

学的な次元に求めていたのだが、ショーペンハウアーの「物自体」が「共苦」の究極的根拠になり得ることを問題視して、「自己」の「価値」を肯定する「利己主義」の徹底化を図っていた。このとき、ニーチェは、文化的「戦略」を、「意志」形而上学から「自然学」へと転換していて、19世紀の生物学の知見を踏まえて、「ディオニュソスのなもの」を、歴史的な地平で捉え直そうとしていたのだった。

続いて、第2部では、ニーチェは、「自然学」という文化的「戦略」のなかで、ネオ・ラマルキズムの立場を取ったうえで、前反省的な「衝動」の生成プロセスに、身体の物理的メカニズムを転用しながら、どのように「利己主義」を貫徹しようとしていたのか、について分析した。ニーチェが、とりわけ、注目していたのは、ルーの『諸部分の闘争』のなかで、生物の適応変異の仕組みが提唱されていることであり、同書によれば、身体内部の自然淘汰を通じて、僅かでも外界に適した「細胞」は、たちまちに勢力を広げるというのだった。ニーチェは、このような「細胞」の自己増殖に、「力への意志」を認めたらうえて、「衝動」の根底で繰り広げられる、それらの「意志」の「闘争」に、極限の「利己主義」を見出しつつ、その途方もない形成力を、「ディオニュソスのなもの」と捉え直していたことを明らかにした。

まず、第1章では、ニーチェは、「行為」の導出過程に関して、「衝動」間の「闘争」を経て、最も強い「衝動」が主導権を握るとしたうえで、前反省的な「衝動」の生成過程に踏み込むべく、19世紀の神経学の成果を参照していたことを示した。さしあたり、ニーチェは、主に、ランゲの『唯物論史』を通じて、「意志」の働きを仮定せずとも、「行為」が引き起こされる仕組みは、外界の刺激から身体の反応が生じるまでの、神経プロセスによって説明し得ることを知っていた。ただし、ニーチェにおいては、このような物理主義的な身体機構は、「精神」（物質の対義語として）を不要化してしまう点で、文化的な「価値」創造のために、「衝動」の根底に、より根本的な欲求を見出すには適さない、と判断されていたのだった。

次に、第2章では、ニーチェは、19世紀の神経学から発生学に関心移して、細胞の増殖運動に「力への意志」を認めつつ、胚の発生過程とのアナロジーで、前反省的な「衝動」の生成過程を解釈しようとしていたことを詳らかにした。とりわけ、ニーチェが依拠していたのは、ルーの『諸部分の闘争』の胚発生説であった。この学説に従えば、「細胞」間の「闘争」では、最も生命力の強い細胞が、「消耗の過剰補償」ゆえに、ほかの細胞を駆逐しながら、自己増殖を繰り返す結果、同質な細胞同士が合生して、器官を形成するというのだった。続いて、「器官」間の「闘争」においては、異質な器官同士で、「自己調整」が働き、あまりに生命力の強い器官は、全体を破壊してしまうために自滅して、結果的に、相互に調和の取れた器官同士が生き残って、身体を形成するとされた。ニーチェは、このようなルーの胚発生説に倣って、「衝動」を「器官」に準えたらうえて、各々の「衝動」を、細胞の「力への意志」が集約したものとして解釈していたのだった。

そして、第3章では、ニーチェは、このルーの胚発生説が、そもそも、適応変異のメカニズムを説明したものである点に注目して、多様な環境下において、生物の形態は、奇怪なままでに変容する生命力に、「ディオニュソスのなもの」を見出していたことを突き止めた。ルーによれば、身体内部でも自然淘汰は生じていて、とりわけ、「細胞」間の「闘争」は熾烈を極め、僅かでも外界に適していれば、その「細胞」が、「単独支配」を収めることで、生物の進化のスピードは、偶然的な突然変異に依拠するよりも、格段に速まるというのだった。

ニーチェは、このようなネオ・ラマルキズムの見解に倣いつつ、「衝動」の根底で、「細胞」同士が、「力への意志」から「闘争」を繰り返す関係構造を、極限の「利己主義」と捉えて、その完膚なきまでの無慈悲に、生物の途方もない形成力を感じ取っていたのであった。

最後に、第3部では、ニーチェは、このように、前反省的な「衝動」の生成過程に「ディオニュソス的なもの」を見出したうえで、そこから「残虐性」が生じてくる過程まで考察することで、いかにして19世紀の歴史主義的文化が克服されようとしていたのか、について分析した。ニーチェによれば、人間は、自然界で、他の動物によって、恒常的な窮乏状態に追い込まれて、能動的な適応性を発揮できず、「細胞」の「力」関係が固定化してしまったことが、人間において、「記憶」の発達を促進すると同時に、「残虐性」の「快楽」を醸成したというのだった。このようにして、ニーチェは、生物学的な歴史過程を遡りながら、「残虐性」の「快楽」を感得させようとしていて、それによって、「自己」の「価値」を肯定するパトスを高めて、「真の文化」の実現を試みていたことを明らかにした。

まず、第1章では、ニーチェは、自然界における、人間とほかの動物との関係に注目して、人間の本性は、能動的な適応性ではなく、「残虐性」にあると定義したうえで、その矛先がどこに向けられるのかによって、文化形態が変わる、と考察していたことを裏付けた。ニーチェによれば、人間は、進化の歴史において、ほかの動物に、永いあいだ、虐げられ続けているあいだ、「細胞」間の配置が変化しなかった結果、特定の「衝動」を「記憶」できるようになった一方、「残虐」な仕打ちを加えることは、「快楽」であると思いなすようになったというのだった。そのうえで、ニーチェは、「専制君主」が「残虐性」を外向化していた時代は、「価値」が社会に押し付けられて、その文化形態は「統制的」になるのに対して、社会が「平和」になると、「残虐性」は行き場がなくなり、内向化せざるを得ない、と考察していた。そして、このとき、その程度が過度になれば、「聖職者」において、自罰的な「良心」の由来となるが、内向化が適度に調整されれば、「芸術家」らのあいだで、「多様な文化形態が生じ得るというのだった。

次に、第2章では、ニーチェは、「価値」創造の源泉を、「残虐性」に措定したまま、主権の所在に従って、古代ギリシア、中世・近世、19世紀という大まかな時代区分を設けたうえで、文化形態の変遷について、さらに議論を広げていたことを突き止めた。筆者の見解では、ニーチェが、そもそも企図していたのは、文化優位主義の立場から、千年単位というタイム・スパンに立って、人権を、今日的なものとみなして、権力者の視点から、「真の文化」のあり方を見極めることであった。まずは、古代ギリシアは、「貴族」同士が、「残虐性」の外向化によって、「自己」の「価値」を競い合う、「競争的」な文化形態であり、続いて、中世・近世は、「専制君主」が、「残虐性」の外向化によって、「価値」を「臣民」に押し付ける、「統制的」な文化形態である、と捉えられていた。さらに、19世紀の文化形態は、「資本家」が、「残虐性」の無化によって、「価値」を「市場」に合わせると、(刹那的で、)「迎合的」なものに墮すが、「芸術家」が、「残虐性」の適度な外向化によって、「価値」を「自己」のなかに押しとどめれば、(持続的で、)「求心的」なものになり得るというのだった。

そして、第3章では、ニーチェの晩年に執筆された批評・作品においても、「生理学」という「戦略」に基づいて、19世紀の歴史主義的な文化を克服するのが、中心的なテーマになっていたことを詳らかにした。まずは、『ヴァーグナーの場合』と『ニーチェ対ヴァーグナー』を取り上げた。ニーチェの解釈では、ヴァーグナーの「楽劇」で、音楽よりも、演劇

が重視されたのは、「大衆」の反応を得るためであり、『ニーベルングの指輪』と『パルジファル』のヒロインの解放もまた、女性の社会進出を予期するものであるとされた。このようなヴァーグナーの「当世風」に対抗して、「価値」創造の源泉を、「残虐性」に措定し直すべく、1880年代後半に構想されていたのが、ニーチェの「芸術の生理学」であった。ニーチェにとって、19世紀の生物学の知見は、「自己」の「価値」を肯定する「快樂」を表現するための、概念的比喩であり、それは、既知の事柄を、より分かりやすく説明する付随的なものではなく、未知の事柄が、初めて分かるように説明される本体的なものだった。『ツァラトゥストラ』という詩的作品では、まさに、このような「生理学」という文化的「戦略」が「実行」に移されるように、「価値」創造のパトスを極限にまで高めて、エートスへと変質させることが企図されていた。ニーチェにおいて、「歴史主義」の「自己超克」とは、各時代に共通する「価値」創造の源泉を掘り出し、「競争的」、「統制的」、「求心的」という三つの文化形態を打ち出すことであった。ただし、このように、「過去」を反省しているうちは、「真の文化」は構想されるにとどまってしまうため、「未来」において、ニーチェの「戦略」を「実行」しつつ、習慣にしてしまう者こそが、「超人」と呼ばれていた。つまり、ニーチェにとって、「永遠回帰」の「瞬間」とは、「理論」と「実践」の境目にあって、「過去」の三つの文化形態を肯定すると同時に、「未来」において、それらの文化形態を反復しようとする転換点なのであった。

以上の通り、本稿では、ニーチェは、19世紀の歴史主義的な文化を克服するべく、「自己」の「価値」を肯定する「利己主義」の貫徹を図っていて、その際、「残虐性」の「快樂」を感得させるために、当時の生物学の知見が、概念的比喩として転用されていたことを明らかにした。最後に、このようなニーチェの文化批判は、根本的には、哲学よりも、むしろ文学と親近性が高いことについて、言及しておきたい。これまで分析してきた通り、ニーチェは、人間や世界の根本原理の究明を目指して、論理的整合性の取れた概念体系（ロゴスのためのロゴス）を築き上げたのではなく、文化的な「価値」創造の源泉の発掘を試みて、情緒的共有性を重んじた概念装置（パトスのためのロゴス）を作り上げようとしていた。しかも、ニーチェの目的は、芸術家の主観に靈感を与えることだった以上、ロゴスとして体系的にまとめて、理解されるだけで終わるよりも、たとえ誤解に曝されてでも、パトスが感覚的に伝わるのが優先されていたのではないか。もしそうであるならば、ニーチェが、あえて断章形式を取り、曖昧な比喩表現で書き連ねていったのもまた、たんなる修辭的な飾りではなく、その修辭性こそが、本体であったと認められよう。つまり、このようなニーチェのロゴスの文学的側面は、「理論」を構成している最中は、「実践」に及ばず、「実践」に踏み切ろうとすれば、「理論」は忘却されねばならないアポリアに行き着き、文化的な「価値」創造の実現に向けて、パトスを、極限まで高める役割を担っていたのである。ということは、ニーチェの「生理学」という概念的比喩は、身体の物理的メカニズムは、主体の行動中には、意識に上らないという点でも、前反省的な「衝動」の生成過程に転用されていたと解せよう。筆者は、このように、「生理学」上の「理論と実践の相補性」に準えて、ロゴスをパトスの表現手段として活用しつつ、エートスの変質を企てる思想を総称して、「ポスト有機体論 (Postorganismus)」と名付けたい。